

ふるさとの自然と歴史

野生植物を訪ねて

福岡市・立花山のクスノキ



本会理事・九州大学農学部助教授

井上

すずむ 平白

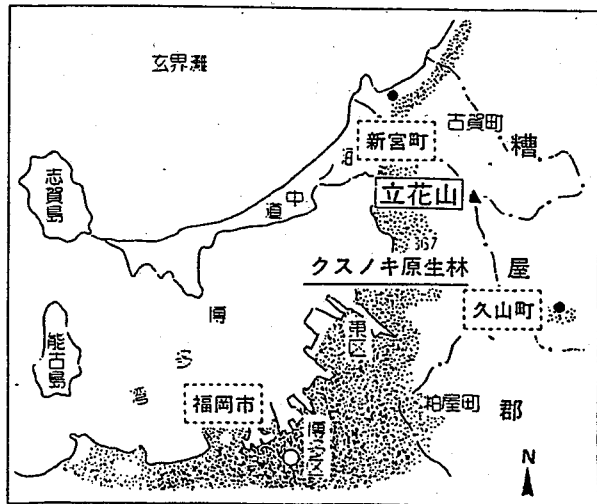
福岡市東区と糟屋郡久山町および新宮町の三境界にまたがって聳える立花山（標高三六七メートル）は、福岡市民はもとより近郊の人々のハイキングや小・中学校の遠足に人気がある山です。その魅力の第一は、深いクスノキの森林を抜けて山頂に立つと展望が一度に開け、眼下に福岡市全域から博多湾、海ノ中道そして志賀島から玄海灘の大海原までが眺められ、福岡近郊で一番景色がよい山だからでしょう。また、中腹から上部はかつての



樹界の仁王のように天を圧して聳える立花山最大のクスノキ「七股の大榎」

立花城址で、戦国時代の末十六世紀後半に、この山城をめぐって、二度の大争奪戦が繰りひろげられた名高い古戦場でもあることから、歴史探訪で登る人も多く見られます。立花山が最も美しく生き生き見えるのは、春四月です。それは山腹のクスノキの大木が一斉に若葉を展開する時で、橙色から黄、黄緑色へと変化して行く様は花のように美しく、全山の樹冠がむくむく涌き立ち、個々の木の存在が遠くから判るほど輝いています。ここに、

自生するクスノキは、その数凡そ三千本と推定され、胸高での幹周り三メートル（胸高直径約一メートル）前後のものが最も多く、最大の通称、「七股の大榎」は、推定樹齢約四百年、幹周りが十メートル（直径三メートル以上）、樹高三十メートルに達し、巨幹の側に立つと圧倒されそうなる迫力です。山全域が国有林で、そのうち林相の優れたクスノキ林、百十一ヘクタール



が国の特別天然記念物「立花山クスノキ原始林」として、さらに自生の北限地にもあたるということ、一九五五年（昭和三十年）に指定を受け、保護林になりました。ところが、その後、植林ではないか、という説や、自生北限の疑問点など、種々と取沙汰されていますが、いずれにしても立派なクスノキの巨木林には違いありません。これらの問題点については、後ほどまた触れたいと思います。さて、このクスノキはクスノキ科の常緑高木で、時に高さ五十メートル、直径八メートルに達し、樹齢が八百年以上という長命を保つので、我が国ではスギやヒノキなど針葉樹を除く広葉樹の中では最も長生きの木です。巨大な樹幹から太枝を四方に張り、うっ蒼と

葉を茂らせた樹形は、何か靈力が宿っているように感じられることから、昔より神社・仏閣に植えられてきました。現在、西日本で神木や天然記念物の巨木の殆どがクスノキといわれるほど多く、特に福岡の太宰府天満宮と宇美八幡宮境内の巨木群は御神木であり、天然記念物にもなっています。また、県のシンボル・ツリー「県木」として選んでいる県は、熊本・佐賀・兵庫の三県もあって、長寿と雄大な樹形に県の「弥栄え」を重複させたのでしよう。殊に兵庫県は、県民の敬愛する楠木正成一族とも結びつく木ということで決まったそうです。

分布は関東地方南部から九州までの暖地に自生し、台湾や中国南部にもありますが、沖縄・奄美群島などの琉球列島に分布しないのは不思議で、何か地史的な原因があるのでしょうか。自生地からいっても立花山を北限地にするのは、分布上おかしい気がします。

葉は、表面にクチクラ層が発達した光沢ある常緑性、すなわち照葉で、三つの大きい葉脈が走る特徴的な葉を小枝に互生させ、春、新芽が展開する前後に黄や紅変した古葉を落とし若葉と入れ替わります。成葉が小枝に着いている期間を観察しますと、ほぼ一年から二年以内と照葉樹の中では短期に入る方です。手で揉むと独特の「樟脳」の香りが材と共に



照葉樹特有の艶々と光る常緑の葉と円らな黒紫色の果実が美しい。

あって、クスノキの学名 *Cinnamomum camphora* の素になった精油（樟油）を含んでいます。この属名 *Cinnamomum* とは、ギリシャ語で *Kino*（巻く）+ *amomos*（香味）の香りを含有の意、また種名 *camphora* は、アラビア語の樟脳で、共にクスノキの主成分を表わしたものです。材から採れる樟脳は、三十年位前までは衣類の防虫剤として家庭でもよく使われていましたが、今はナフタリン等の化学合成薬品が取って代りました。戦前

の樟脳は南九州や台湾で盛んに生産され、日本の重要な輸出品でもあったそうです。

花は、若葉が鮮やかな緑色になる五月頃、新葉の腋に房状に着いた小さな淡黄色の両性花を多数咲かせ、晩秋に直径約七ミリメートルの艶やかな黒紫色の果実を結びます。

私が今年（一九九四年）の一月に立花山を訪れた時には、この香気の強い実を食べに沢山のヒヨドリが群がり、ピー、ピー、ピー鳴く

声か森中に満ち、道には無数の落ちた果実で足の踏み場もない程でした。しかし、毎年、林内に多量の果実が地上に散蒔かれる割には、発芽した幼い苗や稚樹が全くといってよいほど存在しないこと、それに森林内に若木がなく、比較的集って生育している場所は、以前に大木が枯れた空地や台風で木が倒伏した箇所であること等から見ても、この木の生態的な特性が、太陽光線が十分に当たる場所です。初めて発芽・成長できる陽樹だということを示していることから推量して、先述の植林された説のみでも納得できるのですが、私はもう少し複雑に、戦火がきっかけの自然更新と植林の両方ではないだろうか、と思いました。それは、二度の戦乱ですっかり焼けただれた山肌にくスノキの稚樹が自然に芽生え更新、旺盛な成長を見た城主（？）は、クスノキの適地と知り、当時から有用な築城材であった樟材を賄う森林にするため、近在の山から多くの苗木を集め植林した後、「御留山」として禁伐・保護してきたのではないかと想像逞しく考えたのです。

クスノキ原始林の起源説素はともかく、この貴重で素晴らしい香気溢れる巨木林が、大都會の福岡市内に存在すること自体、森に入ると奇蹟のように感じられます。ぜひ森林浴を兼ね、登山されることをお勧めします。

（裏表紙の写真にクスノキの立花山を掲載）